

1904年

第1章 清朝の混迷

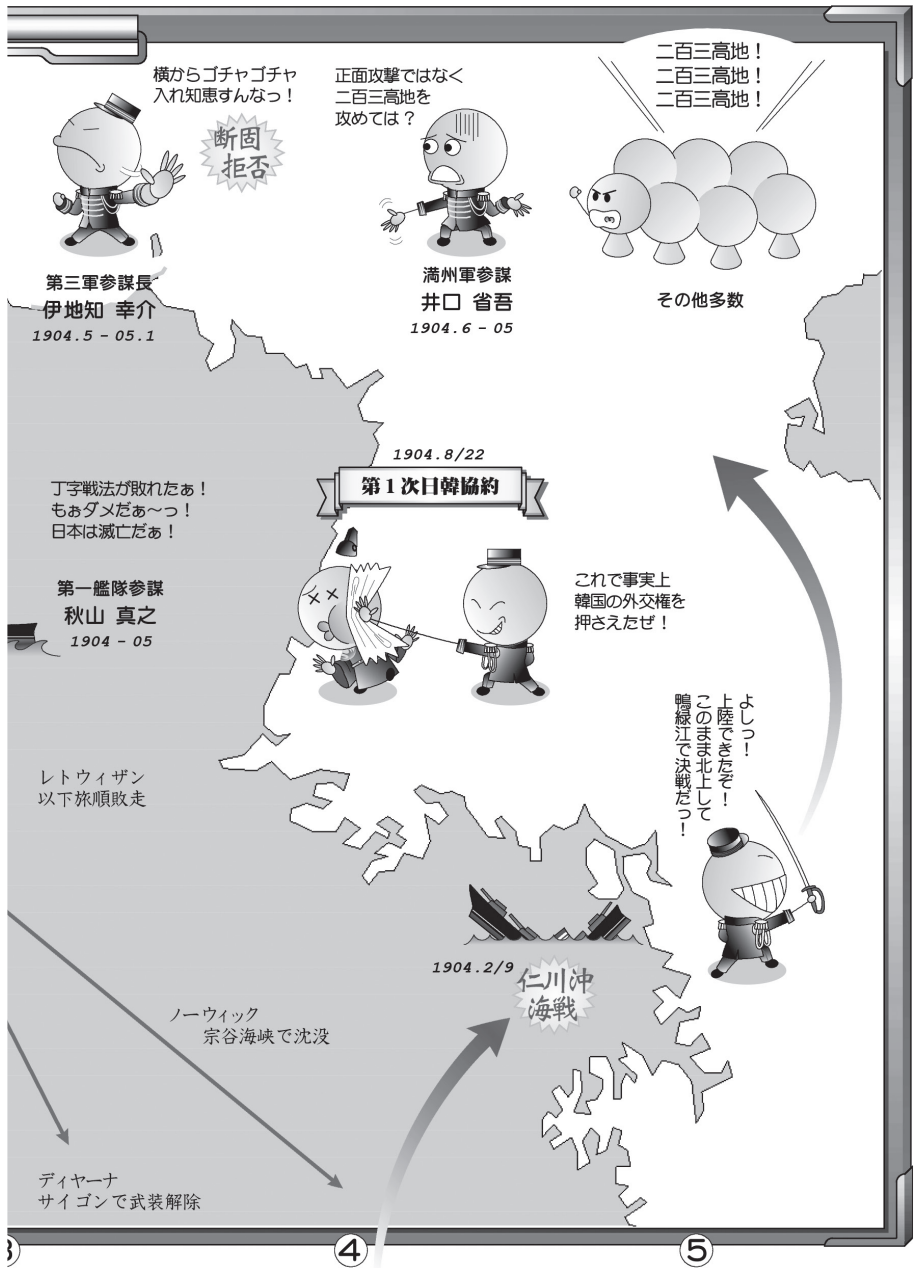
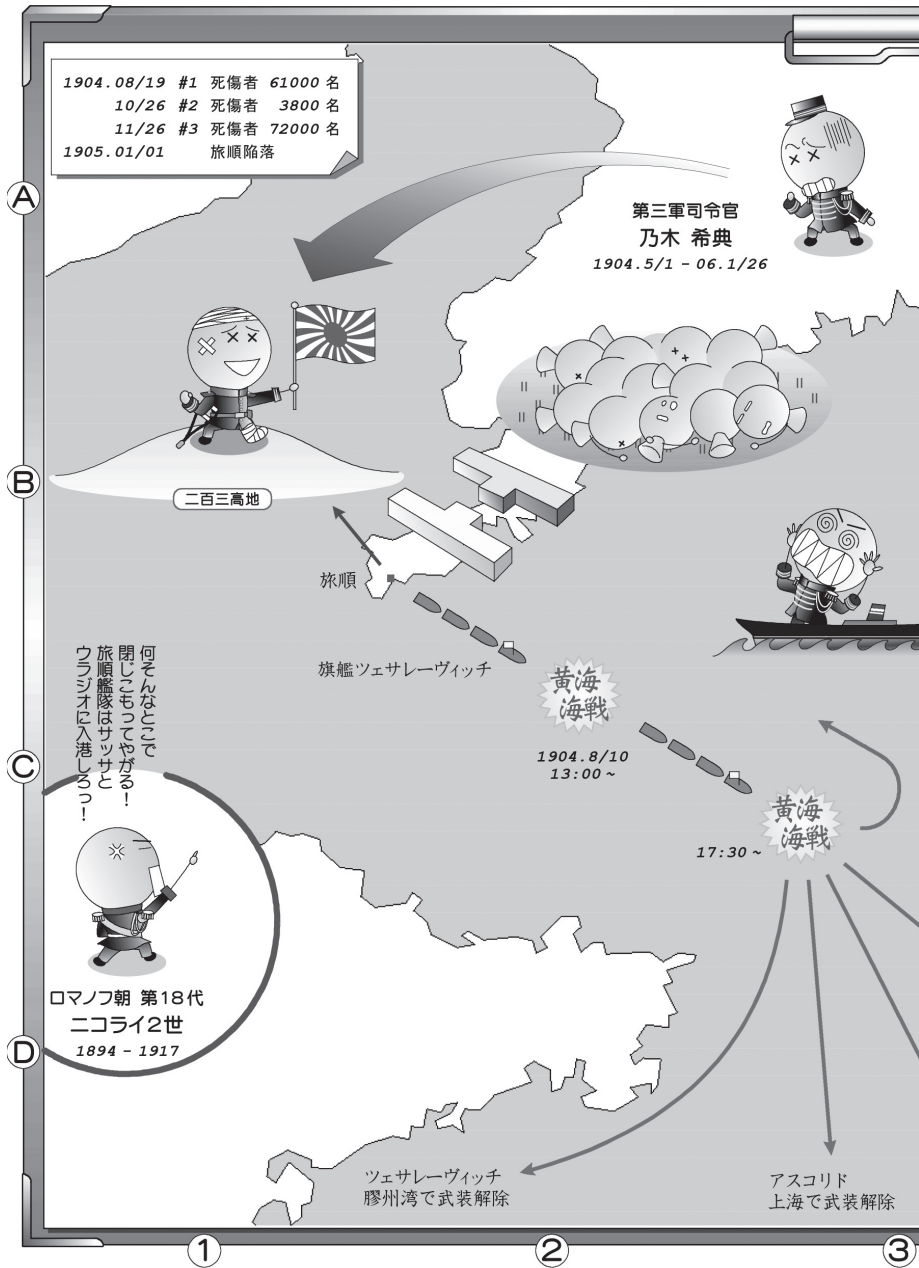
第2章 日本開国

第3章 日清戦争

第4章 中国分割と日露対立

第5章 日露戦争

〈日露戦争 激戦〉



さて、ここで、連戦連敗にイラだっていたロシア皇帝ニコライ2世が、勅令を下しました。

「旅順艦隊はマカーキーごときに何をビビっておるか!!」

ただちに出港し、ウラジヴォストークに入港せよ!」(C/D-1)

そうして、旅順艦隊がとうとう港から出てきました。

よし! こいつを叩けば、戦争はグッと楽になる!

第一艦隊参謀であった秋山真之^{さねゆき}(*01)は、ここで、かねてより研究していた「丁字戦法」をしをかけます。

しかし、これが大失敗でした。

秋山は「丁字戦法」の陣形にこだわるあまり、のちに「不可解な艦隊運動」と酷評される“ブラウン運動”のような動きをしてしまい、こちらがフラフラしている間に、旅順艦隊に逃げられてしまいます。(*02)

ここに来て初めて、「丁字戦法は、戦意のない敵には通用しない」ということが判明しましたが、それに気づいたときには、敵艦はすでに大洋の彼方^{かなた}。

レーダーのないこの時代、日没の後、海は漆黒の闇に包まれ、もはや追跡は不可能です。

日本艦隊は全速力で15.5ノット、旅順艦隊は14ノット。

日本艦隊の方がわずかに速いとはいえ、このとき日没まであと4時間。

戦闘時間も考えれば、追尾に割ける時間は最大でも3時間が限界。

3時間ぼっちで追いつくのは、どう計算しても不可能な距離にまで、すでに引き離されていました。

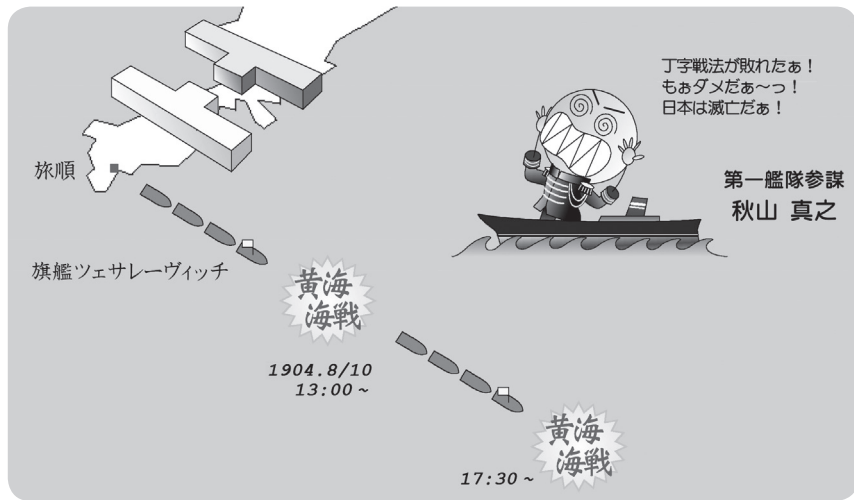
まさに、取り返しのつかない大失態でした。

(*01) 司馬遼太郎の『坂の上の雲』の主人公として有名な人物。

彼を知る者は、一様に彼のことを絶賛しており、島村速雄大将の「その知謀、湧くがごとし」という賛辞は特に有名です。

(*02) この艦隊運動の動きも詳しく見ていくとたいへんおもしろいのですが、紙面の都合上、割愛せざるを得ませんでした。

このまま、旅順艦隊が無傷でウラジヴォストークに入港してしまえば、日本の海上輸送はズタズタにされてしまい、戦争は敗北に終わり、ひいては、日本の滅亡が決定します。



絶望感に包まれる中、艦長の東郷平八郎は命令を下します。

「全速前進! 敵艦隊を追え」

——しかし、もはや追いつくのは不可能かと。

「…追え」

——大櫓^{メインマスト}が折れそうです! 速度を落としましょう!

「全速力で追え」

もはや追いつくのは絶望的、そのうえ全速を出すための命綱である大櫓^{メインマスト}が被弾し、根本がもげ、ミシミシと音を立てて今にも折れそうになっていました。

しかし、それでも速度を落とすわけにはいきません。

そうすれば、その時点で、日本の滅亡が決定してしまうからです。

おのれの失態のせいで、日本が亡びる。

東郷平八郎、秋山真之^{さねゆき}の心中や、いかばかりであったでしょう。

ところが。

ここで奇蹟が起きます。

なんと、追尾開始から3時間後、水平線の彼方に敵艦を発見したのです。

まさに天祐！ まさに奇蹟！

それにしても、なぜ???

どうして、追いつくことができたのでしょうか。

論理的に不可能なはずです。

じつは、旅順艦隊も逃げるのに必死。

全速力で飛ばしていましたが、それが仇となり、なんと、二番艦^{あた}レトウィザンにエンジントラブルが発生、速度が落ちてしまっていたからでした。(*03)

しかし、これで解決ではありません。

日没はすぐそこに迫ってきています。

一刻も早くカタをつけなければなりません、まともに戦っても勝てるかどうか。

じつは、当時の戦艦の大砲というのは、「狙って当たる」というものではなく、何十発、何百発撃っても、あの大きな艦体にカスリもしない、なんてこともザラでした。(*04)

ですから、そういう事情を知らない方の中には、「分厚い装甲の胴体に当てなくても、司令室にブチ込んでやればイッパツじゃん！」と思われる方もおられるようですが、そんなことはまったく不可能でした。

したがって、海戦というのは時間がかかるのが常識。

にも関わらず、日本には時間が残されていない、という厳しさ。

ところが！

ここで、またしても奇蹟が起きます。

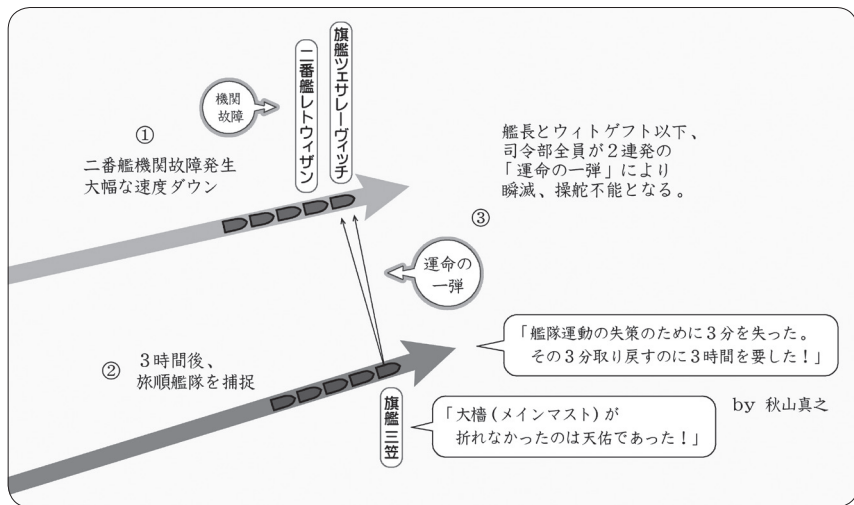
(*03) ここで、旅順艦隊の艦長イワノフは、「速度の低下したレトウィザンを見棄てて、自分たちだけウラジオへ逃げる」という選択肢を選ぶ道もありました。

しかし、彼には「仲間を見棄てて逃げる」ということはどうしてもできませんでした。

もし、彼がそれをしていたら、日本はロシアに滅ぼされていたことでしょう。

(*04) マンガのように、「百発百中！」「敵艦は一発で撃沈！」というわけにはいきません。

旗艦「三笠」の主砲から放たれた「運命の一弾」が、敵旗艦ツェサレーヴィッチの司令室に見事命中したのです。



これにより、敵旗艦は、ウィットゲフト提督以下、司令部の人間が一瞬で消し飛んでしまいます。

しかし、まだ艦長イワノフはかろうじて生きていました。

このように、旗艦がその機能を失った場合には、ただちに「旗艦権委譲信号」を二番艦に送ることになっていましたので、艦長は、信号を送るべく作業に入ったところ……！！

もう一発、三笠の主砲弾が司令室に飛び込んできます。

なんと、「運命の一弾」と呼ばれる奇蹟は2連発で起きたのです。

これにより、司令部に生き残っていた者たちもすべて即死！

なんと、旗艦の司令室は瞬間的に消滅し、二番艦以降がまったくそれに気がつかない、という常識では考えられない状況が生まれます。

こうして、旗艦ツェサレーヴィッチは、操舵が不能となり、突如、回頭しはじめましたが、二番艦以下、なぜ旗艦がとつぜん回頭しはじめたのか、まったく理解できません。

しかし、航行不能に陥ったのなら、その旨の信号が来るはず。